述語句並列におけるミ並列の位置づけ

岩　田　美　穂

1　はじめに

寺村（1991）で指摘されているように、英語等の他言語と比較すると現代日本語には使い分けを必要とする並列的な接続を担う形式（以下、並列形式とする）が豊富に存在する、という特徴がある。ト、ヤ、ニ、カ、トカ、ヤラ、ナリ、ダノ、などの並列助詞、タリ、シなどの接続助詞をはじめとして、「ϕ（、）[1]」や活用語の連用形、接続助詞のテやバ、取り立て助詞のモ、ニシロ、トイイ、意志形＋ガ、などの複合辞まで並列形式として含む場合もある。これらの形式は歴史的にみると、いずれも元々並列形式だったわけではなく、他の機能をもった接辞であったものが、歴史的な推移の中で並列の機能を獲得してきたものである。現代に至る過程で上記のような多様な並列形式が分化し全体として並列形式は増加してきたが、一方で歴史的には現代では失われてしまった並列形式も存在する。

このように、並列を担う形式は多岐に渡り、現代語にしても古典語にしても、個々の形式に関する研究は非常に多い。一方で、体系的な研究は、少ない。現代語に関しては、寺村（1991）を始めとして、近年、中俣（2015）が出されるなど、一定の体系的な研究がなされてきている。史的研究についても、個々の形式に関する変化の記述は積み重ねられてきた

[1] 具体的な形式はないが、口頭ではわずかなポーズ、書記では「、」が置かれることが多い。

が、包括的な視点をもったものは此島（1966）による部分的な記述のみであり[2]、現代語に比して、全ての形式を視野に入れた包括的な研究は遅れている。各時代に見られる（生じる）並列形式がそれぞれどのような関係にあり、並列形式の推移として見たときにどのように位置づけられるか、を考えていく必要がある。

並列形式は、並列できる要素によって、名詞句のみの並列ができるもの（ト・ヤ・ニなど）、述語句のみの並列ができるもの（タリなど）、名詞句・述語句の両方の並列が可能なもの（トカ・ヤラ・ダノ・ナリ・カなど）の３種に分けられる。本論では、このうち、述語句並列に焦点をあて、その推移をみていく。

２　問題の所在

現代語において述語句並列を担うタリは、完了の助動詞の終止形を出自とする。タリが並列形式として用いられるようになるのは鎌倉期頃であるが、ほぼ同時期（中古末から鎌倉期）には同じ完了の助動詞を出自とするヌ、ツも並列形式として用いられていた。

(1)　a.　一町計ヲヨガセテウキヌシヅミヌタヾヨイタリ。（延慶本平家・第五末・61オ）

b.　七十人シテヲロシケル大船ヲ、一人シテヤス〳〵トアゲツヲロシツシケリ。（同・第五本・64ウ）

c.　皆人ハ重キ鎧ノ上ニ重キ物ヲ負タリ懐タリシテ入レバコソ沈ケレ（同、第六本39オ）

鎌倉期頃には、３つの形式が並行して見られるが、ヌが中古末に最も早く見られやや遅れてツ、タリが見られる。その後、ヌが室町期に衰退しツに吸収され、ツが江戸初期頃に衰退し、最終的に現代のようなタリ

[2] 並列形式を包括的に扱った研究ではないが、近年、衣畑（2011）において、付加節を由来とする並列形式の発達過程について、一定の方向性が認められることが指摘されている。

一形式となった（岩田2006、京2013など）。この３つの形式は共に完了の助動詞の終止形出自であり、成立時期もほぼ同時期である。さらに、ヌがツに置き換えられた例や、ツとタリが一緒に用いられている例などが観察されることから、互いに影響を与え合ったかなり近い形式であったと考えられる（以下、この３つの形式にまとめて言及するときにはタリ型と呼ぶ）。

さて、このタリ型が成立する以前に、述語句の並列に用いられた形式として次のようなミによる並列があることが知られている。

(2) a. わき挟む　子のなくごとに　男じもの　負ひみ抱きみ（負見抱見）　朝鳥の　音のみ泣きつつ　恋ふれども　験をなみと　（万葉集481）

b. いと弱げに、殻のやうなるさまして、泣きみ笑ひみ、かたらひ給ふ。（源氏・柏木、16）

ミによる並列は、上代から中古にかけて用いられ、その後見られなくなる。中古末にタリ型で最も早く成立したヌによる並列が見られるようになるため、一見すると述語句の並列は、ミ→ヌ→ツ→タリのように移り変わったように見える。しかし、ミによる並列とタリ型との関係はこれまで詳細に検討されてこなかった。

上代・中古に見られる並列用法のミを考察したものに、大秦（2005）があるが、次のような点を指摘している。

①『伊勢物語』以降に「―ミ―ミ」が形式化を果たし、「―ミ―ズミ」という新たな形態も派生させた。

②万葉集までの―ミの上接動詞の主語は有情物に限られ、中古以降は非情物も拒まない。

③②における動詞の偏りから、ミは「試みる」意をもつ動詞「見る」を由来とする。

大秦（2005）の主眼は③の点にあり、ミによる並列が「並列形式として」どのようなものであるかを論じたものではない。

以上のような点から、本論は、ミによる並列を「並列表現史」の中にどのように位置づけられるのかを考察することを目的とする。具体的にはまず、ミによる並列の展開を概観したうえで、ミによる並列がタリ型にどのようにつながるかを考察する。以下ミによる並列をミ並列と呼ぶこととする。

3　ミ並列の展開

ミ並列は、上代・中古を通して見られるが、大秦（2005）の指摘するように、上代のミ並列と中古のそれとは性質が大きく変化していると思われる。よって、以下では、上代と中古に分けて、各時代のミ並列について概観していく。

3.1　上代のミ並列

上代資料として『萬葉集』から用例を採取した。ミ並列と思しき例は合計８例見られる。以下に用例をあげる。（３b）にあげる「引きみ緩へみ」が合計３例見られ（３bに挙げたもののほか2640番歌、2989番歌）、その他は全て以下の１例ずつである。

(3)　a.　わき挟む　子のなくごとに　男じもの　負ひみ抱きみ（負見抱見）　朝鳥の　音のみ泣きつつ　恋ふれども　験をなみと　（万葉集481、２再掲）

b.　はね縵今する妹がうら若み笑みみ怒りみ（咲見愠見）付けし紐解く（万葉集2627）

c.　梓弓引きみ緩へみ（引見緩見）思ひ見てすでに心は寄りにしものを（万葉集2986）

d.　…その妻の児と朝夕に笑みみ笑まずも（恵美々恵末須毛）うち嘆き語りけまくはとこしへにかくもあらめや（万葉集4106）

(4)　a.　か黒し髪をま櫛もちここにかき垂れ取り束ね上げても巻きみ（挙而裳纏見）解き乱り童になしみさ丹つかふ（万葉集3791）

b. 初花を枝に手折りて娘子らにつとにも遣りみ白たへの袖にもかき入れかぐはしみ置きて枯らしみあゆる実は玉に貫きつつ手に巻きて見れども飽かず　(万葉集4111)

ミ並列は、一般的に「補助動詞として用いられる見ルからの派生」と言われており、「～してみたり、～してみたり」のような意味であるとされる(『時代別国語大辞典　上代編』など)。典型的には、(3a, b)のように対比的な動詞を取り、反復される動作を表すとされる。

上代の例で特に注目されるのは、(4)のような中止法的な用例が見られることである。中古以降では、和歌、散文を通してこのような例は見受けられない。大秦(2005)はこれらの例をミ並列の「原初的な形態」(p.11)と述べているが、本論でも、ミ並列の原初は(4)のような中止法的な使用であったと考える[3]。(4a)では、「(髪を)櫛で解いてここら辺まで垂らしたり、まとめて束ね上で髻を結ってみたり、また解き乱してさんばら髪にしてみたり」の意であり、(4b)は「初花を枝ごと折って乙女らに贈ってやったり、袖にもしごき入れ、良い匂いなので、しぼむまで置いたりし、落ちた実は玉として緒に通し、手首に巻いて見ても飽きない…」の意である(現代語訳は『新日本古典文学全集　万葉集』を参照)。意味から考えて、これらの例では、～ミ句は、(4a)では「かき垂れ」、(4b)では「かぐはしみ」「手に巻きて」と並べられた句であることがわかる(5)。

(5) a. か黒し髪をま櫛もち[ここにかき垂れ][取り束ね上げても巻きみ][解き乱り童になしみ]さ丹つかふ

b. 初花を[枝に手折りて娘子らにつとにも遣りみ][白たへの袖にもかき入れかぐはしみ][置きて枯らしみ][あゆる実

[3] 後で述べるように、タリ型も並列用法の前段階として、中止法を獲得しており、中止法をもつことは、述語句並列への移行に重要であることが予想される。

は玉に貫きつつ手に巻きて］見れども飽かず…（4再掲）

上記のような例は、ミがもともと「並列のための」形式であったのではなく、連用形やテ形と同様の中止法としての機能をもった形式であったことを示唆している[4]。そのため、ミが並列されて（つまり、～ミ～ミの形で）用いられる必然性はなかったものと考えられる。用例（3c）の「笑みみ笑まずも」と後半にミが現れない例は、ミがこの段階では「並列形式」ではなかったことを示しているとみてよい。

しかしながら、数の上ではV1ミV2ミの形で、ミが繰り返される例が多いのも事実である。では、V1ミV2ミ構文の存在はどのように考えられるだろうか。上代・中古には、周知の通り、動詞の重複形によって反復する動作を表す、という構文が存在している。動詞重複形は、主に終止形ないし連用形によって形成されるが、これは「同じ動詞」が「重複される」ことによってその反復性を顕在化させているものである。

(6)　春雨の止まず降る降る我が恋ふる人の目すらを相見せなくに（万葉集1932）

この動詞を重ねることによって反復を表す構文（反復構文）の一種に、異なる動詞の連用形またはテ形を重ねたものがある。

(7)　a.　…あやに恐み昼はも日のことごと夜はも夜のことごと臥し居嘆けど飽き足らぬかも（万葉集204）

b.　…つつじ花にほへる君がにほ鳥のなづさひ来むと立ちて居て待ちけむ人は大君の…（万葉集443）

---

[4] ミの由来については、判断を保留にしたい。万葉集においてミは「見」または「美」で表記される。いずれもミ甲類が用いられており、通説通り「ミル」の連用形とみても矛盾はない。しかし、「試みる」を意味する補助動詞としての「ミル」は「Vテミル」という形で現れやすく「連用形＋ミル」でどの程度用いられていたかが不明である。また、接尾辞のミとしては形容詞語幹に接続するいわゆるミ語法の「ミ」もあり、ミ語法には原因理由を表す例だけではなく並列的（中止的）に用いられる例があることも合わせて考える必要がある。これらの点を考えると、中止法を担う接辞としてのミがあったと仮定してもよいのかもしれない。

V1ミV2ミは、恐らくこのような連用形やテ形を重ねることによって反復を表す例と同様に、異なる動詞を取るミが重ねて用いられたものであると推測される。

このように、上代ではミは連用形やテ形と同様の中止法を基本機能とし、その延長としてV1ミV2ミという異なる動作の反復を表していたものと考えられる。ミは数の上では、中止法として用いられる例よりも反復構文として用いられている例の方が多い。このような反復構文としてのミが多用されるなかで、「V1ミV2ミ」がひと塊として認識され、反復構文専用の形態として形式化していったと考えられる。ミが形式化した背景には、連用形やテ形は、いうまでもなく通時的に中止法を担う中心的な形態であり、その点で反復構文を担う有標の形式とはなりにくい一方、ミはそうではなかったという点が大きく影響しているだろう。

3.2 中古のミ並列

中古に入るとミは必ずV1ミV2ミの形で用いられる。対比的な動詞を取るだけでなく、「V1ミV2ズミ」の形で否定形を伴う例（用例８b）も多数見られることから、大秦（2005）が述べる通り、中古に至ってミは形式化し、「並列形式」となったと見てよい。

(8) a. 曇りみ晴れみ、たち居る雲やまず。(伊勢、149)

b. 今日しも、時雨ふりみふらずみ、ひねもすにこの山いみじうおもしろきほどなり。(蜻蛉、285)

c. 「…」など、活けみ殺しみ、いましめおはする御さま、(源氏・蛍、425)

並列される動詞としては、「曇り・晴れ」(伊勢)、「降り・降らず」(蜻蛉)「言ひ・言わず」(平中２例)「たえ・たえず」(蜻蛉)「照り・曇り」(蜻蛉)「見え・見えず」(源氏)「活け・殺し」(源氏)「恨み・泣き」(源氏)「たのみ・うらみ」(紫式部日記) などがある。最も多いのは、「泣き・笑ひ」

で落窪１例、蜻蛉２例、源氏９例、である。

ミ並列は中古においては散文、和歌に広く見られるが、11世紀頃をピークとして、中古末期ころから衰退したとみられる。「泣き・笑ひ」が最も遅くまで残ったようで、『今昔物語集』『栄花物語』まで見られる。

ミ並列が衰退した背景には、以下のような要因が考えられる[5]。

・　語の固定化

・　マ行四段動詞連用形との衝突

散文においては11世紀後半頃から「泣きみ笑ひみ」に使用が偏っていく。元々、反復されうる動作のバリエーションはそれほど多くはないと考えられる。したがって、必然的に使用される語が限定され、表現の固定化を招くことになる。大秦（2005）でも、次の例をあげ、中古においてこの表現が「語らいを描写する場面の慣用的な表現として通用していた」（P.10）と指摘している。

(9)　a.　中納言も、過ぎにしかたの、飽かず悲しき事、そのかみより今日まで、思ひの絶えぬよし、折々につけて、あはれにも、をかしうも、「泣きみ笑ひみ」とか、言ふやうに、聞え出給ふに、（源氏・早蕨、349）

この点に関しては、後に述べるヌやツも同様で、反復構文を担う形式はこのような表現の固定化を招きやすいと言える。

マ行四段動詞連用形との衝突については、上代では（10）のように「―みミ」の形であったが、鎌倉期には（11）のようにマ行四段動詞連用形とミの並列となっている例が見られる。

(10)　はね縵今する妹がうら若み笑みみ怒りみ付けし紐解く（万葉集2627）

(11)　郡司夫婦、御弟子どもなど悲しみ泣きみ、かつは貴み拝みけ

[5] 大秦（2005）はこのほかに和歌における一つの修辞法となったことも要因の一つとして考えている。

り。(宇治拾遺479)

さらに（11）では、直後に「貴み拝み」という連続が出ていることも注目される。竹内（2008）によれば、形容詞語幹から派生されるム型動詞は、中古に入り生産性が増したことが指摘されている。とすれば、中古では、上代以上にマ行四段動詞が増えたことが予測される。マ行四段動詞の連用形とミ並列は外見上同形となるため、マ行四段動詞の増加に伴って混乱が生じ、「V1ミV2ミ」という構造が維持できなくなった可能性は高い。

また、一方で、中古末頃から新たな反復構文を担う形式としてヌができたことも恐らくは無関係ではあるまい。いずれにしても、上記のようないくつかの要因が重なり、ミ並列は12～13世紀頃には衰退したとみられる。

4　ミ並列とタリ型の位置づけ

以上、上代と中古のミ並列を通して、その発生と衰退を概観した。先に述べた通り、ミ並列の衰退と、中古末から反復構文を担うようになるヌの発生は、恐らく相互に作用していると考えられる。次に、ヌ・ツ・タリを含めたタリ型とミ並列の関係について考えていく。

タリ型には、ミ並列と同じく反復構文となる用法（12a）と、例示を表す用法（12b）との２種がある。

(12) a.　彼は部屋の中を<u>行ったり来たり</u>して落ち着かない様子である。

b.　日曜日には<u>読書をしたり掃除をしたり</u>する。

歴史的にはこの２種の用法を区別する必要があり、以下、反復構文となる（12a）を反復並列、そうではない（12b）を例示並列と呼ぶ。

4.1　タリ型の展開

ミ並列とタリ型の関係を考える前に、タリ型の展開を簡単にまとめて

おく。

タリ型の展開については、岩田（2006、2007）等で詳細に論じた。概要をまとめると以下のようになる。

① ヌの成立が最も早く文献上12世紀には見られる。やや遅れて13～14世紀頃ツ、タリが成立したと見られる[6]。ヌは室町期に入る頃には衰退しツに置き換わり、ツは18世紀初期頃に衰退しタリ一形式となった。

② ヌの用法は反復並列のみである。ツ、タリはいずれも反復・例示ともに見られるが、室町期ではツが全用例の約70%が反復並列であるのに対し、タリの反復並列は全体の２%程度である。

③ ヌは連用修飾用法（副詞句）を中心とし、スルを伴った述語句には発展していない。ツ・タリはスルを伴い述語句となる用法を獲得したが、ツが江戸期に衰退する頃には副詞句用法への偏りが見られる。

④ ヌ・ツ・タリはいずれも、終止・連体形の合流によって生じた、旧終止形の衰退に伴った不十分終止用法と呼ばれる中止用法が生じている。並列形式となる前段階としてこの不十分終止用法がある（用例16）。

(13) a. 指ヲ指シツ、低ヌ仰ヌシテ語リ居レバ（今昔物語集、4.251）

b. 「しや首どもをまつてかくさぶらふなり」と、たちぬ居ぬ、指をさしなどかたり居れば、（宇治拾遺、323）

c. 「重盛は慈悲者とこそ聞こえつるに、など信頼をば申たすけやらむ」とておきぬふしぬなげき給へば （平治、245）

---

[6] なお、山田（1982）では、『今昔物語集』のツ型並列の例として次のものを指摘している。

①南ノ戸ヨリ入ラムト為ルニ、其戸ハタト閉ツ。驚テ廻テ西ノ戸ヨリ入ル。亦其戸ハタト閉ヌ。亦南ノ戸ハ開ヌ。然レバ北ノ戸ヨリ入ルニハ其戸閉テ、西ノ戸ハ開ヌ。亦東ノ戸ヨリ入ルニ、其戸ハ閉テ、北ノ戸ハ開ヌ。如此廻々ル数度入ラムト為ルニ、閉開ツ入ル事ヲ不得。（今昔物語集／巻２４・十五話）

下線部を「トジツヒラキツ」と読む。この例に関して、本論ではツ型の確例としていない。

(14) a. 究竟ノ兵者已上七騎、早走ノ進退ナルニ乗テ、歩セツアガセツ、屋嶋ノ館ヘゾ馳行ケル。(延慶本平家、第六12オ)

b. 山カ高ホドニ夜ガヲソクアケツ日ガ早晩ツナンドスルソ(漢書、58オ)

c. 懐妊ノ時毒ヲクウツ辛物ヲクウツナドスレバヲリツナドスルガサウモナイゾ (毛詩、二十12オ)

(15) a. 「…近寄給へ。互ノ手ナミ見タリ見ヘタリセム。」トゾ申ケル。(同、第五本34オ)

b. 告許 ウツタヘタリヒキスヘテ罰シタリスルゾ (漢書、45ウ)

c. 導引ハノヒスルコトゾ。ヒキノベタリサスツタリスルコトゾ (蒙求、四39オ)

(16) a. 其次第参テ申ムとスレバ、馬ニハハナレヌ、夜モ更ケタリ、河ノ淵瀬モ見エワカズ。(延慶本平家、二末65オ)

b. 高橋心はたけく思へども、運やつきにけん、敵はあまたあり、いた手は負うつ、そこにて遂にうたれにけり。(覚一本平家、下78)

4.2 ミ並列とヌ並列の関係

上記のような展開をみせるタリ型であるが、このタリ型とミ並列はどのような関係で捉えるのがよいだろうか。

まず時期的には、ミ並列が衰退し始める中古末頃からヌが発達し始める。用法としてはミ(中古以降)もヌも反復並列のみを担う。また、ヌは発生当初の中古末頃は、和歌での使用が目立つ。

(17) a. をし鳥のつたふ岩根に浪かけてうきぬ沈みぬ身をぞうらむる(永久百首393)

さらにミ並列とヌはいずれも変化を表す動詞を取りやすい。

表1　ミ型とヌ型の上接動詞一覧

	上接動詞
ミ	曇る・晴れる、照る、降る、絶える、泣く・笑う、見える、頼む・恨む、活く・殺す、言う、引く、踏む、浮く・沈む、待つ
ヌ	明ける・暮れる、浮く・沈む、立つ・居る、伏す・仰ぐ（寝る）、泣く・笑う

ただし、表1にあげた通り、ミ並列とヌ並列の取る動詞は、一部重なりはあるものの、異なりも大きい。この点を重視するならミ並列とヌ並列は、少なくとも直接的な置換関係（つまり、ヌ並列がミ並列を吸収したという関係）にはないと考えられる。

しかしながら、3つの形式の中で、なぜヌが最も早く反復並列を担うようになったのか、という点を考えると、ミとヌの持つこのような特徴の近さは看過できない。ヌはもともとの助動詞の性質として変化動詞を取りやすいと言われている。中古末頃から不十分終止用法という中止用法を獲得したヌ・ツ・タリの中で、いち早くヌが反復並列へと移行したのは、中古を通して、ミ並列が形式化したことによって、有標形式をもった反復構文という表現形態が定着していたことが大きいと考える。先行するミ並列の存在は、ヌ並列にとって反復並列への参入を促したことが予想され、後発したヌ並列は結果的にミ並列の衰退を加速させたという、相互作用が働いたと考えられるのではないだろうか。したがって、ミ並列とヌ並列は、直接的な置換関係にはないが、反復並列という構文という枠組みの中では、結果的にミ並列からヌ並列へという推移が起こったと言える。

4.3　反復並列としての推移

このように考えると、反復並列は、上代～中古：ミ⇒中世（鎌倉期）：ヌ⇒中世（室町期）：ツ⇒近世：タリ、のように、形式や若干の変質はあるものの、上代から一貫してずっと存在している。つまり、日本語の歴

史の中において反復並列は、述語句の並列として根本的な用法である、ということができる。それは、反復並列が、単に（語レベルで）動詞を並べ立てるだけ、という最も単純な並列構造であることと無関係ではないだろう。

上記のように、反復並列は上代から一貫して使用されているという安定性がある一方で、形式が３回も変化している、という特徴がある。これは、歴史を通じて他の並列形式にはない現象である。なぜ、反復並列はこのような形式の入れ替わりがあるのか。

それは、反復並列が連用修飾句として用いられやすい、という点にあると思われる。特に、ミ、ヌにはその傾向が顕著であり、ツやタリと異なり、「スル」を伴った述語句になることがほとんどない。ツは、室町期には述語句の並列も見られていたが、江戸期には、連用修飾用法に使用が偏り、衰退する。反復される動作は、一つ一つの動作そのものに視点はなく、そのような動作が繰り返されている状態、様態を表すこととなる。そのため連用修飾句として用いられやすい。特に、ミ及びヌは連用修飾句となる例が中心で、述語句となる例の方が少ない。このような連用修飾句での多用は、「V1ヌＶ２ヌ」をひと固まりとする語としての固定化を招いたと考えられる。

青木（2010）によれば、動詞の重複形も並列形式と同様の傾向がみられる。すなわち、終止形重複は、述語句としての機能を失い、連用修飾句として固定化していくことで衰退し、連用形重複はスルを伴い述語句としての機能を獲得することで中世以降活発に用いられるようになるという。他の形式と異なり、タリが長く並列形式として用いられている背景には、タリがもともと反復並列を中心用法とせず、もっぱら例示並列として用いられていた、ということが最も大きな要因と言える[7]。

---

[7] 現代語においてもタリはスルを伴った述語句の並列を基本とすると考えられ、他の形式と異なり、連用修飾句となる場合にも、必ず「V1タリV2タリして」とスルを伴わなければならない。

5　まとめ

以上、本論で述べてきたことをまとめる。

（ⅰ）　上代のミは、中止法を基本機能とし、その延長として連用形やテ形と同様に反復構文に用いられるようになり、反復構文を担う有標の形式となった。

（ⅱ）　中古のミは、並列形式として形式化し、広く用いられるようになるが、12～13世紀頃には衰退する。衰退の要因には、表現の固定化、マ行四段動詞との混同などが考えられる。

（ⅲ）　ミ並列とタリ型におけるヌ並列は、直接的な置換関係ではないが、ミ並列の存在がヌの反復並列への参入を促し、ヌ並列の発生はミ並列の衰退を加速させたという相互関係にある。

（ⅳ）　反復並列という枠組みの中では、ミ→ヌ→ツ→タリという形式の入れ替わりが起こっている。これは、反復並列を用法の基盤に持つと連用修飾句として固定化する傾向にあることが関係している。

本論では、ミ並列を中心に見てきたが、ミ並列・タリ型だけでなく連用形やテ形を含め、述語句並列が全体としてどのように推移していくのか、というより大きな視点での記述が必要である。今後の課題としたい。

【調査・使用テキスト】（下線部は本文中で用いた略省を示す）

新日本古典文学全集『萬葉集』１～４『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』『土佐日記　蜻蛉日記』『源氏物語』１～５『和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』『堤中納言物語』『栄花物語』『狭衣物語』『宇治拾遺物語』『建礼門院右京大夫集　とはずがたり』（小学館）、

以上のテキストは、国立国語研究所（2020）「日本語歴史コーパス（ＣＨＪ）」を用いて調査を行った。

国立国語研究所（2020）『日本語歴史コーパス』（バージョン2020.3, 中納言バージョン2.5.2）https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/

日本古典文学大系『今昔物語集』一～五、『保元物語・平治物語』（岩波書店）、『延慶本平家物語　本文篇』上下　（勉誠社）、続抄物資料集成第四巻『漢書抄』（清文堂出版）、抄物資料集成　第一巻『史記抄』第六巻『毛詩抄・蒙求抄』（清文堂出版）

【参考文献】

青木博史（2010）『語形成からみた日本語文法史』ひつじ書房
青木博史（2016）『日本語歴史統語論序説』ひつじ書房
岩田美穂（2006）「並列表現の史的展開」日本語学会2006年度春季大会予稿集 pp.109-116 於東京学芸大学
岩田美穂（2007）「例示並列形式の歴史的変化―タリ・ナリを中心として―」『日本語の構造変化と文法化』pp.93-113、ひつじ書房
大秦一浩（2005）「接尾語ミの並列用法―『あゆひ抄』所説をめぐって―」『文芸研究』65、pp.1-16、大谷大学文芸研究会
衣畑智秀（2011）「係助詞・副助詞」『シリーズ日本語史３　文法史』pp.167-189、岩波書店
京健治（2006）「並列表現形式の発達とその契機」『国語と教育』31、pp.51-62、長崎大学
京健治（2013）「動作作用の並列表現形式の推移：「たり」形式への収斂」『語文研究』116、pp.1-18、九州大学国語国文学会
此島正年（1966）『国語助詞の研究―助詞史素描』桜楓社
竹内史郎（2004）「ム型・ブ型・ミス型とミ語法の形態論的必然性による推移」『万葉』191、pp.19-40、万葉学会
寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
中俣尚己（2015）『日本語並列表現の体系』ひつじ書房
蜂矢真郷（1998）『国語重複語の語構成論的研究』塙書房
山田巌（1982）『院政期言語の研究』桜楓社
『時代別国語大辞典　上代編』三省堂

〔付記〕本研究はJSPS科研費（19K00638）の助成を受けたものである。